

# 教職大学院 Newsletter

# No. 48

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2012.12.25

## 登山が鍛える感性

福井市安居中学校長 山本 利幸

「はたして、子どもたちは動物としての生気で満たされているのか？」

体験活動は、豊かな人間性、自ら学び考える力などの生きる基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されている。なかでも自然体験は、子どもたちにとって、感動、心わくわく、はっとする気づき、発見の喜びや想像力を働かせる楽しさ、夢中になれることなどの感性を最大限に伸ばす可能性を秘めている。

しかしながら、その一方で、子どもたちの感性の喪失が問題になっている。

科学の恩恵を受けた快適な都市空間は人間の寿命を延ばし、病気の根絶と治療に貢献した。しかし同時にこの空間は、自然と訣別して科学的で衛生的な文化都市の中で、自分を甘やかす生活空間になった。人間は苦痛より安楽を選び、不快を避けて耐えることをせず、ついには健康を維持するための闘う抵抗力を弱くして、健康を喪失する。

それだけでなく、人間は他の生物との共存を拒否して、進化における自然淘汰を拒否するようになってきている。このことは、人間の自然に対する勝利の凱歌ではあるが、同時に自然との訣別を意味し、人間本来の動物的な感性の喪失につながるのではないだろうか。

では、感性の喪失を食い止めるにはどうしたらよいのか。いうまでもなく、不快刺激に直面することであるが、『不快』回避に成功し続け『快』刺激に慣れてしまっている人間が、果たして不快に対する寛容さを取り戻せるだろうか。

1973年にノーベル医学・生理学賞を受賞した動物行動学の創始者として世界的に知られるコンラート・ローレンツは著書『文明化した人間の八つの大罪』の中で、人間の「感性の衰減」を憂え、教育の重要性について述べている。

「近代技術の発達、とりわけ薬学の発達は、不快を避ける一般人の傾向を以前には考えられなかったほど促進した。」

「感性の衰減に対抗し、その治療する可能性について考えてみよう。原因が容易に理解できても、それを取り除くことは難しい。欠けているのは、明らかに天賦自然の障害である。その克服が人間を鍛えて、不快に対する寛容を強いる。・・・(中略)・・・このような障害の存在を広く教えることは、教育が完全に果たすべき課題であるに違いない。」(以上本文引用)

しかし、豊かさを求め、快適な生活を志向する文明人の考え方はいっこうに変わる気配はない。むしろ、ますます危ない方向へ進んでいるように写る。

『快』と『不快』の二つの刺激が受けられ、最高の喜びを味わえる「登山」は、感性を取り戻す最適な自然体験活

動のひとつであろう。

「登山の魅力」は「(はっきりした形態の)非日常」ではないだろうか。天候急変や極限的な疲労、道を失うことによる遭難、さらには、転落や滑落による行動不能などのリスク(リスクが相対的に高いほど、冒険的で挑戦的な要素を含むのだが)がある。そのため、自分の体力(登るだけでなく下山の余力も含めて)や精神力、山や天候などに関する知識が必要であり、五感を総動員して自分を守りつつ目的地を目指す。反面、神々しいまでの山の夜明け、風が肌に触れる感覚や沢の水の味、小鳥のさえずりや木々のざわめきなど多種多様な自然が鮮やかに飛び込んでくる。それに私たちの身体が刻々と反応し、どんな思考にも依拠することなく感動が生まれる。

インターネット等を通して得られる知識・情報に囲まれた情報社会の中の生活は、生身の人間や自然など「生きとし生けるもの」との直接的な心のつながりの実感や感動を希薄にさせてきている。だからこそ、意識や思考を通してではなく、直接に一人一人の身体を通しての体験が重要になってくる。それは、子どもたちにとって揺るぎない感性を育むとともに、自らの感性に立って、彼らの世界を歩む源泉ともなるに違いないだろう。

冬の北アルプスに身を置くとき、雪の白さと凍てつく寒さは、人を厳格な自然と対峙させる。そのとき、人は大自然に対して畏敬の念を抱かざるを得ない。



### 内容

- 登山が鍛える感性 (1)
- スクールリーダー・フォーラムに参加して (2)
- 他校の研究会への参加報告 (4)
- ワシントン大学視察の報告 (6)
- 日本教職大学院協会シンポジウムの報告 (7)
- 11月合同カンファレンスに参加して (7)
- 連携校だより (10)
- 日本教育方法学会の報告 (13)
- 日本教育心理学会に参加して (13)
- ラウンドテーブルの案内 (16)

## スクールリーダー・フォーラムに参加して

福井大学教職大学院 森 透

先日の11月24日(土)10時30分から17時30分まで大阪教育大学天王寺キャンパスで第12回スクールリーダー・フォーラムが開催された。大阪教育大学は夜間大学院で、現職の先生方が意欲を持って入学している大学院である。大阪教育大学と福井大学との関係は昨年9月に福井大学で開催された日本教師教育学会に大阪教育大学から参加してくれたこと、11月に大阪教育大で開催されたフォーラムに福井大学から参加したことで交流が始まった。今年夏休みの集中講座にも大阪教育大学の現職院生3名が参加してくださった。今回のフォーラムには福井大学教職大学院から教員6名、院生3名、修了生3名の12名で大挙して参加させていただいた。当日は118頁もの冊子『第12回スクールリーダー・フォーラム スクールリーダーの学びの場—理論知と実践知の対話—』が配布されたが、その冊子には両大学の教員と当日報告される院生・修了生の報告原稿が掲載されており、このフォーラムの準備の確実さとしっかりとした歩みが感じられた。

10時30分からの開会挨拶では、栗林澄夫氏(大阪教育大学理事・副学長)、川村幸治氏(大阪府教育委員会教育監)、沼守誠也氏(大阪市教育委員会教育次長)の3名が登壇され、その後2つの基調講演が行われた。1つ目は寺岡英男氏(福井大学理事・副学長)



「実践コミュニティにおけるスクールリーダーの学び—実践知と理論知の架橋—」、2つ目は大脇康弘氏(大阪教育大学教授)「スクールリーダーの学びの場を創る—理論知と実践知の対話—」であった。それぞれが、2つの大学における取組みの全体像を紹介し、今回のフォーラムの意義を述べるという内容であった。



現職の先生方が休職せずに大学院で学ぶといった点では福井大学教職大学院との共通点も見られるが、その他のコンセプトや大学内外の状況、目指す方向性が全く異なるこの大阪教育大学夜間大学院が主催するスクールリーダー・フォーラムになぜ3回も参加したいと考えたのであろうか。

その第1は、このフォーラムに参加してくる大阪の教育を引っ張るスクールリーダーたちの溢れんばかりのエネルギーに魅せられたからであろう。中央(東京)が何を言おうと自らの課題を自らの手によって自分の編み出した方法によって

午後はいよいよメインのラウンドテーブルであった。準備段階では大脇先生と電話で打ち合わせを何度も行い、当初の報告時間の30分を、福井大学の経験をお話して、倍の1時間に延ばしていただき、その時間でじっくりと実践を語り傾聴するというラウンドの持ち方に変更していただいた。ラウンドテーブルの小グループは全部で12グループであり、約2時間30分の中で報告者2人という構成となった。福井大学から参加した教員6名はグループの司会進行役、現職教員の院生3名と修了生3名の合計6名は全員が報告を行った。3名の院生はいずれも2年生で2年間の長期実践研究報告をまとめている段階の中身を報告していただき、修了生3名は現在の職場での取組みと大学院での学びを自由に語っていただいた。福井大学の教員が司会をしたグループはすべて大阪の報告者であり、福井からの報告者の司会進行は大阪の教員が担当された。

私が司会をしたグループは、院生の西川潔先生(奈良県御所市立葛城小学校教頭)と修了生の井出一志先生(大阪市新森小学校首席教諭)のお二人が報告者であった。最初はグループ6名がそれぞれ長めの自己紹介を行い、参加した問題意識と自身の実践の歩みを語られた。どのようなメンバーでグループが構成されているのかを事前に理解することは司会者としては非常に大事なことであった。本番のお二人の報告はそれぞれじっくりと語られ、私自身はお二人の実践の歩みを深く理解することができた。特に、西川先生のご報告には深く考えさせられるものがあった。2度も大学院進学を断念し、ようやく3度目で進学できたこと、鳴門教育大学の佐古先生から多くを学び、佐古理論の批判的検討もふまえつつ、現在の職場の改革・マネジメントを実践されていることに深い共感と「理論と実践の架橋」の一つの在り方を認識することができた。

最後の全体報告会では3人の先生方(小山将史氏、木原俊行氏、中西正明氏)のまとめと感想、そして大阪教育大学教授の富田福代氏の総括講演「スクールリーダーの学び—大阪と福井を起点に—」はポイントを押さえて両大学のつながりと意義を表現された。

夜の懇親会もとても楽しかった。昼の部である意味緊張した場と、夜のある意味リラックスした場のそれぞれが意味を持った協働のフォーラムであったと述懐している。今回参加された教員・院生・修了生の感想を以下にご紹介したい。

福井大学教職大学院 川上 純朗

解決していこうとする能動的なパワーは、福井の教員にはあまり見られない。

第2は、今大阪で始まっている行政主導の教育改革の渦が、全国規模の大きな渦になる可能性がある現在、渦の中心の風速を感じたいという欲求があったからであろう。校長の公募制やメリハリのある教員給与体系の推進などこれまでの改革とは一線を画し大胆な構造転換を図ろうとしている大阪の教育界で何が起きているのか肌で感じたいと思ったからである。

よくよく考えて見ると、教育委員会制度が定着し、行政と学校が歩調を合わせて学校改革に取り組んでいる福井は、学校内部のミドルリーダーによるボトムアップダウンの学校改革を目指し、教師一人ひとりの強い使命感によって学校改革を行ってきた大阪は、今トップダウンの改革の渦の中にある。歴史や地域性とは反対のベクトルによって時代を変えようとする今の動きは、偶然なのであろうか、必然なのであろうか。

このフォーラムの趣旨とは全く異なるこのような視点か

ら、フォーラムに参加してきた人々と同じ時間を過ごさせていただいた。もちろん、結論は見えない。だが、時代が動きつつあることは肌で感じる。そして最も感じたのが、このような強風の渦の中にももしたたかさとしなやかさを持ち続ける大阪の先生方の力強さ。福井に不足しているのはこの点だろうか、この教職大学院のどこを変えるとこのようなパワーが生まれてくるのであろうか。このようなことを考えながら大阪を後にした。

## スクールリーダー養成コース2年／嶺南教育事務所 赤城 美紀

11月24日(土)、大阪教育大学天王寺キャンパスで行われた、第12回スクールリーダー・フォーラムに参加させていただいた。大阪教育大学の夜間大学院については、これまで参加してきた実践研究福井のラウンドテーブルで講演を聞いたり交流したりする機会はあったが、「学校での勤務が終わってから夜間に大学院で学んでいる」「派遣という形ではなく、全員が自ら志学して学んでいる」ということぐらいしか知らなかった。また、当日そこで報告をするということで、自分には荷が重いという気持ちもあり、このお話をいただいた時には正直どうしようか迷っていた。しかし、教職大学院での学びの時間も残り少なくなった今、「福井からもう一歩踏み出して勉強してみることが大切なのは」「せいかくの機会なんだしもっと貪欲に学ばなくては」と勇気を出し、参加することを決意した。

フォーラムは2部構成で、午前中の第1部では、福井大学と大阪教育大学それぞれのスクールリーダーの学びについての講演があった。福井大学の『学校拠点-大学院拡張方式』そして、大阪教育大学の『フォーラム-夜間大学院ブリッジ方式』、学びの方法は違っても、人が学び続ける、自ら求めて学ぶ、ということについては、両者とも同じなのだと感じた。2校の違いよりも、志を同じくするものであり、違いがあるからこそ互いに切磋琢磨して成長しているのだと強く感じた。

午後からの第2部は、いよいよラウンドテーブルである。

「いつもどおりで」「気楽に」と福井の先生方の笑顔と励ましの言葉を受けて席に着くと、大阪ではこの方式が初めてだそう、皆さん興味津々といった感じでのスタートとなった。今回はテーマが『スクールリーダーの学びの場-理論知と実践知の対話-』であったため、大学院での学びと自分自身の実践について、そのつながりを意識して報告をさせていただいた。グループのメンバーからは福井の教育についてのいろいろな質問があり、小グループならではのざっくばらんな雰囲気の中、本音で教育を語り合うことができた。

ラウンドテーブルの後、まとめの全体報告会、総括講演と、外が真っ暗になるまでフォーラムは続いた。ラウンドテーブルで終わるのもよいが、まとめと総括があったことで、今日の振り返りと、両大学のスクールリーダーの学びについて、再度それぞれの特色を整理できたのはよかった。特に自分が学ぶ福井大学教職大学院については、そこで学ぶ者自身がその理念と方法をよく理解していくことで、より実践に生かせるのだと感じた。

このフォーラム参加を通して、自分自身の殻を破り、壁を壊して一歩前へ進むことの大切さを学んだ。そして、信念を持ち継続していくことの大切さ、異なる立場や状況のものや人に対して尊敬の念を持ち協働していくことの大切さを学んだ。ここでの学びとともに、私がここで感じた場の空気感、参加者の意欲と情熱を自分自身のエネルギー源として、今後の実践に生かしていきたい。

## スクールリーダー養成コース2年／丸岡南中学校 遠藤 正宏

平成24年11月24日に、大阪教育大学で行われた第12回スクールリーダー・フォーラムに参加してきました。

午前中は、福井大学の寺岡先生と大阪教育大学の大脇先生の基調講演を聞き、午後よりラウンドテーブル方式で福井大学教職大学院と、大阪教育大学教職大学院の院生(修了生)による報告がありました。

私の班は5人で、参加メンバーの立場は教授、副校長、指導主事と多岐にわたっており、教諭は私だけでした。その中で私は最初に発表をしました。発表のために、今までの歩みと、入学に至った経緯、教職大学院で学んできたこと、拠点校としての取り組み等について振り返り、簡単な報告書を作成していました。その報告書とレジュメをもとに40分という短い時間でしたが、簡単にまとめて語る事ができたと思います。残り20分の質疑応答の時間では、主に勤務校での立場や勤務校について、拠点校と大学院との関わりについての質問が多く、福井大学教職大学院への関心の高さが伺えました。

続いて、大阪教育大学教職大学院修了生の磯島秀樹先生の発表を聞かせていただきました。磯島先生は、校長先生という立場で、しかも退職3年前に入学を決意し、2年間しっかり学ばれたそうです。報告をお聞きしながら、先生

のエネルギー溢る学びへの熱い思いを感じることができました。今では、甲子園短期大学の特任教授として活躍されているそうです。先生の教職大学院での学びは「通過点」だと言われたのが印象的でした。

発表の後、報告会があり、最後に大阪教育大学富田福代先生の総括講演を聞きました。2つの大学の違いについて、改めて理解することができました。

フォーラムの後、懇親会でした。ここでは、先ほどのフォーラムの時のような緊張感はなく、ざっくばらんに酒を酌み交わしながらそれぞれの大学院での学びについて語り合うことができました。(もしかしたら懇親会の時の方が語り合ったかも)朝も早く、短い時間の中にたくさんの内容が詰め込まれ、目が回るような日程でしたが、違う大学の院生の方と知り合うことができ、また新たな学びを得ることができました。大変有意義な経験をする事ができました。ありがとうございました。



スクールリーダー養成コース2年／至民中学校 中谷 忠裕

午後のラウンドテーブルでは6人のグループにおいて、教職大学院での学びを学校の実践につなげようとしている内容を発表させていただいた。今回のフォーラムでは両大学の取り組みを比較しながら、スクールリーダーの学びの場のあり方が検討された。大阪教育大の教職大学院では、実践知と理論知をつなげることを目指しておられた。そこで学ばれているのは校長や教頭、指導主事の立場の方が多く、過去の卒業生の論文も必然的に学校運営に関する内容が占めていた。一方、私たち福井大の教職大学院のメンバーは管理職ではなく、学校では管理職と若手教員をつなぐミドルリーダーとしての役割が求められる立場の教諭が主体である。

発表は、自己紹介を兼ねて至民中学校の特色ある教育活動を説明した。次に、教職大学院の学びの様子について夏期集中講座を例に挙げ説明し、合同カンファレンスやラウンドテーブルでの省察や気づきを学校の実践につなげようとしていることを伝えた。

至民中では、教室と廊下を区切る壁のない開放的な建築で、隣り合わせる教科の広場と一体として使える。机を前に向けた教師が一方向的に解説する授業だけでなく、多様な授業スタイルを創り出せる仕掛けとなっている。校舎のハード面だけでなく、問題解決型学習を中心に据えた単元作り心掛け、生徒が十分に話し合えるように授業時間も70分になっていることを伝えた。教科センター方式を取り入れ、生徒が学ぶ教科が変わるたびに教室を移動することで、自ら学びに向かおうとする主体的な態度を育成しようとしているとも説明した。

グループでの話し合いでは、至民中の特色への質問と疑問が相次いだ。生徒は学校を選んで入学できない。基本的に校区にある社南小学校の児童がすべて入学し、校区外から応募して入学することもできる。このように学校を選択できない状況では、教育委員会や教師が目指す教育スタイルを生徒に強制していると受け取れると指摘された。至民中学校で目指すスタイルに合わない生徒もいるのではないかと。壁のない開放的な空間で多様な学習を進めても、こ

れまでの教室の授業スタイルからの脱却を図ろうとするのなら、学校を選べる自由がないのは、自己撞着しているとの意見も出た。

クラスター制に適應できる生徒もいれば、そうでない生徒もいる。至民中の環境や仕組みへのレディネスが生徒には求められることから、小学校との連携も話題に上がった。従来型の校舎で育ってきた子どもたちが、広々とした空間に戸惑っている面もあるだろう。特別に支援が必要な生徒にとっては、教室から他のクラスの授業が見え、物音が聞こえる環境では落ち着くことは難しい、学習環境があまりにも激変することが学校の今の状況を招いている一因ではないかと話し合われた。

学校のシステムを当たり前と考えてきた私には、今回のラウンドテーブルでの指摘は深く考えさせられるものだった。生徒に学校を選ばない自由がない中で、斬新な教育活動は強制にすぎないとの指摘は、大変厳しい。学校に入学したから、ここのスタイルでの生活を求めるだけでなく、生徒の実態を把握した段階的な指導が教師に求められる。小学校と連携し、学習や生活上のルールに共通性を持たせることも必要だ。教室と生活の場となるホームが分離し、教科が変わるたびに教室移動を求めるため、従来型の学校以上に入学時からのガイダンス等の丁寧な指導が必要だ。斬新な校舎と教育スタイルの理論を支える具体的な指導の積み上げが求められ、まさしく「理論知」と「実践知」のつながりが必要だと学ばせていただいた。



他校の研究会への参加報告

スクールリーダー養成コース1年 林 明宏

講義調の一方通行の授業、居眠り、おしゃべり、飲食…。高等学校の先生方には大変失礼ながら、私にとっての高等学校の授業といえば、こんなイメージであった。今回、滋賀県立彦根西高等学校の公開授業研究会に参加して、私の前述のような授業観を大幅に修正することになった。

そもそも私がこの学校の公開授業研究会に参加することにしたのは、6月のラウンドテーブルの際、この学校の教務主任の先生の発表を聞いて衝撃を受けたことがきっかけである。滋賀県を代表する進学校と目と鼻の先にあるこの学校は、以前は授業の成立が困難な一公立高等学校であった。それを学校の再生には力を厭わないパイオニア達の強力なリーダーシップのもと、「学びの共同体」を標榜する学校改革を推進したとのことであった。ラウンドテーブルの際いただいたこの学校のパンフレットには、卒業生の授業のアンケート結果が「ど真ん中の一等地」に記載されている。他の高等学校のパンフレットや学校案内の類は、「進路状況」「学校行事」「部活動」などが記載事項の中心であることを

考えると、いかにこの学校が授業改革に本気で取り組んでいるのかが伺えるというものである。

公開授業研究会に先立って行われた公開授業をいくつか参観させていただいた結果、未だこの学校の学校改革の取り組みが発展途上であること、毎日先生方が生徒相手に奮闘しておられること、などの印象を持たざるを得なかった。学校改革は一進一退であり、言葉で言うほど簡単なことではないことは容易に想像できた。公開授業を参観した段階では、それほど大きな期待を持つことはできないでいたのである。ところがその後に行われた公開研究授業、授業研究会を参観して、この学校が実はゴールに向かって一直線に疾走しているとの確信を得ることができた。

教科は家庭科であった。食料自給率を題材とし、生徒に食生活を考えさせていく50分の中には様々な仕掛けが仕込まれており、大学入試科目でないことや40人という大所帯であるという悪条件をもとせず、全員の学びの保障という困難な目標を確かに形にしていたのである。教師に

も生徒たちにも笑顔が目立ち、教室は50名以上という参観者の存在を全く感じさせない、緊張感とは無縁の、柔らかい空気で満たされていた。

加えて授業後の研究会。驚いたのはこの学校の先生方が、一人一人の生徒を実によく観察しておられるということであった。全校で12学級という高等学校としては小規模であることを差し引いても、この学校の本気度を十分に物語っている。先生方の発言の一つ一つを聞いていると、学校全体に目の前の生徒の学びを保障しようという気力が充溢し、学校がまさに一つにまとまろうとしていることがよくわかった。高等学校では、このように授業を他者に公開することに抵抗を感じる教師が少なくないと聞く。それを年間2回の公開研究会を行い、熱心な論が飛び交う事後研究会を実施するという実践を積み重ねてきたことに敬服させられた。高等学校で授業改革？という半信半疑の思いでこの

学校の門をくぐった数時間後に、相好を崩さずにはいられない自分がいた。

このような取り組みを可能にしているエネルギーはどこから来ているのだろう。現状に満足し、その状態を継続させることに注力するだけでも、相当なエネルギーが必要なことである。それを現状維持どころか、授業研究や教室を開くことに対して腰が重い教師達をここまで変貌させるとは！ここまでするのに大変な時間と労力が注がれていることは想像に難くない。その実践の一端が記されているであろう、ラウンドテーブルでいただいたレジメをもう一度熟読したいという衝動に駆られた。

半日という短い時間であったが、現実には改革を成し遂げつつある学校を直接観察することができた。清々しい気持ちでこの学校をあとにした。

## 教職専門性開発コース1年 齋藤 宏

今回は安居中学校の研究集会に参加させてもらいました。今年4月に分離新設された新しい学校であることから想像していましたが、実際に自分の目で見てみると学校の設備の新しさもさることながら、生徒たちの活き活きとした笑顔、自信に満ち溢れた表情、3学年を通じての仲の良さ等のまさに「新しい学校」という言葉だけでは表現しきれないような多くの姿を見ることができました。福井県で3番目、小規模校としては初めての取り組みとなる教科センター方式を導入した本校は、教科センター方式のメリットである、学年を通して、常に学びの姿が見える教科スペースの作成を行っており、先輩の学習を見て後輩が期待に胸を膨らませる「学びの場」が形成されているように感じました。

全体会の中で説明を受けた本校独自の企画では、『AGOトップアスリート育成早朝ランニング』や『入校時の一礼』等があり、本校の研究目標である『社会参画型学力の育成～交流・体験を通して培う豊かな学び～』の中でも謳われている交流・体験を重視した取り組みが紹介されました。『AGOトップアスリート育成早朝ランニング』では、当初の選抜メンバーから枠を広げ、多くの生徒が自主的に、しかも継続的に取り組んでおり、さらに校長先生を始めとした教員も一緒になって取り組んでいる。それによ

って生徒と教師の一体感、心理的な距離の近づきなど双方にとっても多分なメリットとなっていることが考えられます。また『入校時の一礼』については、生徒に学校や地域の方々へ感謝の心を持ってほしいという思いから企画され、朝の趣ある風景となっていることが想像されました。

研究紀要の中からは、見崎洋之先生の『ノーチャイムについて考える』や『毎時間出席簿』等が紹介されました。自分の興味としては『ノーチャイムについて考える』が非常に興味深く感じられました。従来の「ノーチャイム＝時間を守る」という概念に疑問の目を向けたものであり、分離前の本校では施設面で打つことができなかつたために行われていたノーチャイムをどうするか、という先生から学校を良くしていこうという機運を感じるすることができました。

自分も現在インターンで比較的新しい中学校に入らせてもらっていますが、今回の安居中学校の研究集会に参加したことによって、「常に学校をより良くしようとする」ことの重要性が少しながらも見えてきた気がします。決して最新の設備や施設だけで学校が上手く機能するわけではなく、そこに関係する人々の意識が「より良く」の方へ向いていることによって学校というのは地域の中心となり、またその機能を十分に発揮することができるのではないかと感じました。

## 教職専門性開発コース2年 北島 正也

去る11月16日に丸岡南中学校の自主研究発表会、21日に安居中学校の公開研究発表会に参加させていただきました。昨年度も、丸岡南中学校の研究会には参加しましたが、今年度は授業そのものでの生徒の学びはもちろんです。授業前を含めたところからの教師と生徒の関係性に着目し、授業を参観していました。両校の授業を参観して気がついたのは、「あたたかさ」があることでした。

丸岡南中学校では、授業開始10分前ごろから生徒が集まり始め、5分前には授業者の先生も生徒も教室に入り、それを大勢の参観者が取り囲むという状態で、生徒も落ち着きがない様子であたりを見回していました。そこで先生は「給食いっぱい食べたか?」「緊張してる?」など、笑顔でやさしい声掛けをしていました。生徒たちもそれに笑顔で応え、公開授業ではあったものの、参観者をも巻き込むような和やかな雰囲気の中で授業がスタートし、授業中も、先生と生徒がともに笑顔でした。また、安居中学校においても、社会科の授業の導入で、先生が「あ、なるほどな。」「本当か?」と、発言する生徒たちに笑顔で語りかけ、それに生徒たちの思考がゆさぶられ、自然と生徒たち

も隣同士、あるいは先生と会話をし、一斉授業の形態であっても先生と生徒の間で、あるいは生徒同士で自然なコミュニケーションが図られていました。

どちらの学校においても、ホワイトボードや地域の人材の活用、あるいは班活動における協働的な学習作業が行われていましたが、今回気が付いたのは、仲間と協働し、探究する授業やそれを成立させる学校の建築のすばらしさは言うまでもなく、やはりそこにいる生徒と先生との関係のよさでした。とにかく笑顔が多かったこと、そして、自分たちが思ったことや考えたことを表明する場が保障されていること、そして、それを先生が受け止めてくれることなど、生徒と先生がともに創っていく授業を見て、今自分が失いかけていることにはっと気づかされました。教科センター方式だ、問題解決型学習だ、といっても、まずは生徒と先生の間で、互いに一人の人間として認め合っていなければいけない。大変な状況ではあるけれども、単にきまりを守らせるなどのかたい話をするだけでなく、生徒ともフランクにかかわり合えるような教師になっていかなければならないと感じました。

教職専門性開発コース1年 長谷川 恵亮

11月21日に福井市安居中学校の公開研究発表会に参加させていただきました。これまで安居中学校には訪れたことがなく、また、4月から教科センター方式を取り入れ、校舎も新しくなったと聞き、どのような学校なのかとも興味がありました。

安居中学校では、まず校舎内をぶらぶらと歩きました。校舎の外観や受付でいただいた資料にあった校舎案内図を見て、何となく広い校舎をイメージしていましたが、実際に歩いてみると、すぐに校舎内を1周できてしまうくらいの広さでした。しかし、校舎の至るところに展示物・掲示物があり、ちょっとした美術館のようでワクワク感やドキドキ感を与えてくれる空間が広がっていました。校舎は風の広場を中心としており、風の広場は突っ切ることができるのでどの場所へも最短距離で移動することができます。教科センター方式では生徒は授業ごとに教室を移動することになりますが、この校舎は移動にかかる生徒への負担を最小限に抑える工夫がなされていると感じました。

公開授業では社会科を参観させていただきました。ICTやゲストティーチャー、教室の外にある学びの広場を使ったグループ学習を取り入れた授業は新鮮で感動しました。また、聞くところは聞く、話し合うところは話し合うという安居中の生徒たちのメリハリのある授業態度にも感心しました。

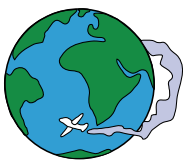
社会科の授業研究会にも参加させていただきました。「生徒の学びの様子」から授業を振り返り、小グループで話し合い、全体で報告するという授業研究会は、私のインターン先である丸岡南中学校の授業研究会と同じやり方でしたが、一つだけ違う点がありました。それは、グループごとにホワイトボードが用意されており、グループで話し

合われたことをホワイトボードにまとめ、ホワイトボードを使って全体で報告するという点です。これは、小グループで話し合ったことをプレゼンテーションするという、グループ活動で生徒に身につかせようとしている力を、教師自身も身につけるための取り組みだと聞きました。私のグループでは、ありがたいことに私が報告者を務めることになりました。しかし、小グループでの話し合いでは、私はホワイトボードを書くのに気を取られすぎてあまり発言することができず、また全体の報告でも、私のホワイトボードは箇条書きで分かりにくくグループで話されていたことをうまく伝えることができませんでした。他のグループの報告者の方のホワイトボードは見やすくまとめられており、非常に分かりやすいプレゼンをされていました。この授業研究会では授業観を深めることができただけでなく、グループの意見や考えをまとめ伝えることの難しさを再確認することもでき、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

安居中学校は今年の4月に新校舎になったばかりで、生徒も教師も分からないことがたくさんあると思います。しかし、安居中学校は学校全体が活気に満ちており、生徒からも教師からも一生懸命さがひしひしと伝わってきました。何事にも学校一丸となって取り組むとても素晴らしい学校だと思いました。

他校の公開研究会に参加するのはこれが初めてでしたが、自分の学校の取り組みとの類似点や相違点を見ながら、多くのことを学ぶことができました。この公開研究会で学んだことを今後のインターンシップに生かしていきたいと思っています。

ワシントン大学視察の報告



国際的な教育評価に資する大学ベンチマーキングの一環で、2012年9月13～18日、米国ワシントン州シアトル市にあるワシントン大学 (University of Washington) と同大学教師教育プログラム連携校を訪問した。

ワシントン大学では大学院修士課程で教員養成が行われているが、今回の視察ではまず、教育実習生を受け入れているMountlake Terrace高校とLeschi小学校を訪問した。両校とも、学校改革の戦略として実習生を受け入れていることが印象的だった。すなわち、大学の教師教育プログラム提携校となって実習生を受け入れることにより、実習生も子どもたちの様子を丁寧に見るようになる。子どもたちのことを実習生も交えて専任教員がよく話をするようになる。実習生のサポートを担当する大学スタッフが頻繁に学校に来るようになり、学校の取り組みをよく見てもらえるようになる。これにより、大学でその学校の事例研究も多く行われることになり、その成果が実習生やコーチやコーディネーターを通じて学校にフィードバックされるようになる。これが、緩やかだが確実な学校改善のスパイラルの1つになる。実習生を受け入れることによる負担よりも、このメリットの方がはるかに大きいので、実習生を受け入れ続けているとのことだった。

福井大学学校教育専攻 遠藤 貴広

また、今回の視察では、米国教育学界の碩学で世界の教師教育改革議論を長くリードしてきたJohn Goodlad氏 (写真右から2番目) や、ワシントン大学の教師教育プログラムの代表を務めているKenneth Zeichner教授 (写真中央) らと、米国における教師教育・教員養成の過去・現在・未来についてじっくり議論することができた。詳しくは別の機会に報告するが、これからの教師教育・教員養成をめぐる日米でも協働して取り組むべき課題は多く、世界の教育実践を支えるために福井で何ができるかを改めて考えさせられる視察となった。



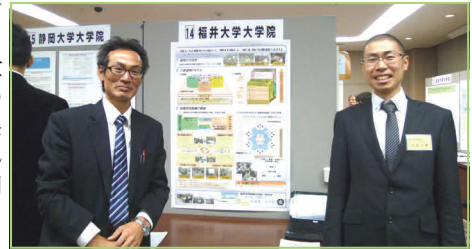
## 日本教職大学院協会シンポジウムの報告

福井大学教職大学院 森 透

さる12月9日(日)に東京の学術総合センターで日本教職大学院協会主催のシンポジウムが開催された。10時30分開会、協会会長の加治佐哲也兵庫教育大学長の挨拶の後、11時から文科省高等教育局長の坂東久美子氏が「新しい教職大学院に期待するもの」と題する基調講演を行った。講演内容は、現在の日本を取り巻くグローバルな視点から教育、特に高等教育に求められていることを、キーコンピテンシーの概念等にも触れながら展開されていた。講演後の質疑で、福井大学の松木専攻長の2つの質問(①大学院の設置要員の大幅な削減問題、②兼任の期限問題)に対して、丁寧かつ慎重に答えていたことが印象的であった。午後のシンポジウムは、4名のパネリスト(藤原文科省初等中等教育局教職員課長、高橋岡山大教授、長島早稲田大教授、熊木東京都教職員研修センター指導主事)の報告後の質疑は活発な意見が出された。特に実務家教員と研究者教員の違いについては率直な意見が交わされた。

シンポジウム終了後は、1階のフロアでポスターセッションが行われ、福井大学教職大学院の2名の院生(岡部・名知両氏)が赤塚第二中学校の実践を熱く語られていた。参加者は熱心に傾聴し質問も積極的に出された。

今回は福井大学から7名の参加者があったが、前日の8日(土)も「実践研究成果公開フォーラム」があったが、天候の関係で参加ができない方も多かった。毎年12月に開催されるシンポジウムが今後も教職大学院の交流と発展に活かされることを期待したい。



## November 合同カンファレンスに参加して

11月17日(予備日程12月1日)に「他校の研究から学ぶ」をテーマとする合同カンファレンスが行われました。今回は、福井県教育研究所の金森誠先生、そして、福井市中藤小学校の高間恵美先生による基調報告に続いて、小グループに分かれた語り合いがじっくりと展開されました。

福井大学教職大学院 吉村 治広

金森先生は、学校全体の教育力を高めようと教育研究所で導入した学校拠点方式によるミドルステップアップ研修の概略と関連エピソード、及び、全国研究所連盟全国研究集会での学びについて話された。

福井大学教職大学院と同じ学校拠点という新しいコンセプトによる取組を展開していく過程において、受講者とその周りの教員の間で様々な認識のズレが生ずることは避けられない。そのようなエピソードのいくつかは、楽しい語り口で紹介されたことで、院生の多くが自分の立場と可能性を捉え直していた。

例えば、校内で参観記録や授業記録をとるコンセンサスを得ようとしても、その必要性が伝わりにくいという問題に対して、その背景に一方通行の授業が多く、生徒の変容を記録しにくい実情があることを踏まえ、一度に変えようとするのではなく、スモールステップで、簡単な参観メモを渡すところから進めるようアドバイスしたという話など、他の院生も直面しがちな過程といえる。

また、全国研究集会では、世代を超える学びやクロスセッションが評価された一方で、多種多様な学校の課題解決のために研究所員が寄り添う力量やマンパワーに関する不安の声、さらに、指導する側の指導主事が「ともに学ぶ」ことに対する疑問の声が寄せられたそうで、こちらも転換の途上を印象づける話であった。

そのような認識の違いは、協働での学びの場となるグループセッションにおいて、態度の違いとして現れることもある。何でも自分の意見に巻き込んでしまうアナコンダ、黙って動かないスフィンクス、ひたすら話し続ける水車の3つに分類した金森先生の例えに、深くうなずく院生が少なくなかった。

続く高間先生は、春の富山市立堀川小学校と秋の福井市至民中学校の研究集会に参加した感想と参加する側の意識について話された。

堀川小学校では、一人ひとりの成長をロングスパンでみていく研究のあり方、そして、何年も続けて参加する参加者にも、それがみえている関係に驚かれたという。子どもが遅くまで残り、鍛えられていることに感銘を受けながらも、自分たちの学校の目指す方向性との違いも意識されていた。また、至民中では、来年、新築移転される中藤小学校に勤務する教員として、苦しい時期に研究会を開催する姿勢や運営等、多くを学ぶことができた。

いずれの研究集会も、これまで分科会や全体会で何かしら発言することで記憶を鮮明にし、アンケートに答えることで自分の考えを整理することで蓄積してきたという高間先生に新たな学びをもたらすものであった。そのような実践を支えているのは、研究会に対する次のような認識である。

まず、即使える「お土産」を期待して行くのではない。それでは、教科や校種を超えた研究会への参加する意欲が湧かない。立派なものをもらうのではなく、むしろ与えるつもりで参加し、奪い取ってくるくらいでよい。すると、開く時の意識も変わってくる。現状をみせて助言をいただく。どうぞ来て教えてくださいというスタンスで開く。結果、開く方と参加する方の双方の身になるのである。最後に高間先生は、今後開催される中藤小学校の研究会には、与えてやるという気で参加していただくとありがたいと締めくくられた。

グループセッションを前に、他校の実践に学ぶ協働の場としての研究会という捉え直しの重要性を再認識するよい機会になった。

スクールリーダー養成コース1年／立待小学校 岩堀 美雪

11月の合同カンファレンスは、「他校の研究から学ぶ」というテーマでした。初めに、金森先生の発表がありました。授業研究を行うことは、小学校や中学校では当たり前であっても、高校に取り入れる時には色々な問題があったこと、それを一度に解決するのは無理なので、スモールステップとして、簡単なことを取り入れたら成果があったという内容が心に残りました。お聞きしながら、このことはとても大切なことだと感じました。例えば、私は今年、自分の学校で研究主任になり新しい研究の方法を取り入れたいと提案しましたが、当初はなかなか理解していただけませんでした。しかし、「全く新しいことをするのはなく、これまでやってきたことに少し加えるだけです。」と説明すると賛同者が増えました。人は、大きな変化は苦手でも小さな変化であれば心の抵抗が少なくなっていくのだと実感しました。また、研究会に参加する仕方を、①アナコンダー自分中心で自己主張が強い人、②スフィンクスしゃべらない人、③水車しゃべり続ける人の3つに分けられていたのはとても分かりやすい例えでした。今後もいろいろな研究会に参加することがあると思いますが、この3つのパターンにならないように気をつけたいと思いました。

次は、高間先生の発表でした。他校の研究会に参加したときは、①目的、考えを持って学ぶ、②受身にならない、③発言する、アンケートに答える、④校内に発信する、という内容が心に残りました。自分のことを振り返ると、これまで研

究会で発言することは4回に1回程度だったと思います。人数が多ければ多いほど勇気はありますが、これからは、毎回発言したいと思いました。

その後は、グループ内での討議となりました。長谷川先生の発言の中に、丸岡中学校の清掃の話が出ました。掃除を一生懸命にすることは、丸岡中学校の伝統で、学校ができた当時から続いているそうです。大変すばらしいと感心しました。お聞きしながら、立待小学校の清掃の様子を思い出していました。縦拭きが終わったら、時間いっぱい横拭きをします。班長が指示する以外はしゃべることなく黙々と掃除に励んでいます。4月に入学した当時の1年生は横拭きがうまくできませんでしたが、今ではかなり上手になりました。6年生が教えている姿も何度も見ました。この良き伝統は、以前の先生方のご指導のたまものだと思います。今後も守り続けていきたいと思いました。

次は、林先生のお話でした。京都藤森小学校、彦根西校を訪問したときのお話でしたが、なかでも、「研究会で先生方が子供たちのことをよく知っている。」という点が心に残りました。立待小学校は、一学年約100名の児童がいます。自分の学年の名前は知っていても、他の学年の児童は知らない子の方が多いかもしれません。気がかりな児童として名前の挙がっている子だけでなく、子どもたちのよい点ももっともっと伝え合っていきたいと思いました。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校 小川 駿也

「自分の軸はどこにあるのかー」11月の合同カンファレンスではこのことを痛感した。

「他校の研究から学ぶ」というテーマに基づき冒頭のオリエンテーションでは、教育研究所の金森誠教諭から、ファシリテーターを困らせる3つのタイプの人についてお話を頂いた。1つ目は自分の土俵に持ってってしまう蛇タイプ、2つ目はほとんど話さないスフィンクスタイプ、3つ目はどこまでも話し続ける水車タイプである。

その後のクロスセッションでは、1年間のインターンシップのまとめの構想について小グループで話をさせて頂いた。そして、私の話は福井大学の学部時代における教育研究集会への参加や教育実習から続く現インターンシップ先である福井大学教育地域科学部附属中学校に対する思いから始まった。その後、4月から半年間関わっている1年生の変容、教育実習生からの学び、アジア州と幕末という2つの授業実践、教科メンター森田史生教諭の授業など、時間軸に沿ってこれまでの歩みを話した。自分で話しながら「結局、何に重点を置いているのか。何が自分の軸なのか。」ということを考えてはいたが見つからず、延々とこれまでの経緯について話をしてしまった。最終的にコーディネーターの濱口教員に「もう時間もないので、まとめに入ってもらっていい。」と言われ、何か無難なことを言って終わってしまったように感じた。

日本語は英語と違い、先にそれまでの経緯や具体的な内

容を言った上で、最後に結論を言う文法的な構造を有しているが、私の場合、その最終的な結論すらあやふやな感じであった。「結局、この人は何が言いたいのか。何をしてきたのか。」と言われるタイプの人、まさにそれが私であると痛感した。軸がなければ、いくら他(校)から学ぼうとしても、漠然と「すごかった。面白かった。」などという平易な感想に終わってしまう。これに関して、同じグループの赤塚第二中学校の岡部誠教諭から「自分と比較させない」と学びは生まれにくいとお話を頂いた。私が弱かった部分は、まさにそれだと思った。授業を参観していても単なる逐語録になるのではなく、「自分だったらどのような授業デザインをするか。自分はどのように子どもと関わっているのか。」という自分に対する還元ができなければ、上述のような漠然とした感想で終わってしまい、それ以上のものは望めない。特に、最近では木村教員が主催されているCo-PARE(教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティ)や他校の公開研究会、院生の授業実践など、他の実践から学ぶ機会が多くあるものの、それを十分に生かし切れていない私がいると思った。

インターンシップも残り数カ月となったが、今一度これまでの歩みを省察し、そして何に自分自身の興味・関心や重点を置いて取り組んでいくのかを考え、私なりの軸を見つけていきたいと思った。

スクールリーダー養成コース2年／中藤小学校 佐野 恭子

多くのことを得た実感で満たされた10月の合同カンファレンス。そして、今度はどのようなことを自分は考えていけ

るのだろうか、と、わくわくしながら臨んだ11月の合同カンファレンスであった。結論は、「やはりカンファレンスは、



楽しい。」である。聞くこと、語ること、考えること、これらがつながり合い、顔を見合わせながら、資料を見合いながら、同じ空間と時間を共有して紡ぎ出す貴重なひとときだなどと素直に感じる自分がいた。語り合うさなかにふと部屋全体を感じると、どのグループも熱気にあふれた話し声でいっぱいであった。嶺南会場（嶺南教育事務所）とも回線で生中継してあり、熱気はきっと嶺南会場にも伝わっていたのではないかと思う。本校も後期の指導主事訪問を控え、その準備等で放課後の職員室は、ここまでの熱気ではないものの、春に比べるとずい分語り合うようになってきたなあなどと思った。

さて「他校の研究から学ぶ」という今回のテーマに関して、まずオリエンテーションとして県教育研究所の金森先生と、中藤小の高間先生から「他校の研究から学ぶことの意味」の下、グループセッションに先立ち全員に対する語りがあった。偶然にも二人の先生は私に縁の深い、前同僚と現同僚という尊敬する素敵な先輩方である。

金森先生は、今年度大きく変化したミドルステップアップ研修（以下ミドル研修）の様子を紹介しながら、教職大学院の学校拠点校システムのノウハウを生かしたミドル研修での学校拠点方式の意義を述べられた。私にとっては前勤務地の話題であり、異動する際には計画段階であったミドル研修が、「情報獲得のための」その日だけの研修から、所員が受講者の学校に向き共に課題解決に向けて協働研究し、「学校全体を巻き込み」実践していく「1年間を通した通年型のプログラムへ転換」したことが分かり、大変うれしく思った。12月の集中サイクルでは、私たちスクールリーダーとミドル研修の受講者との合同クロスセッションが行われるが、その日がずい分楽しみなになった。

高間先生は、ご自身の堀川小学校と至民中学校の訪問時の体験を通して、「他校の研究会から学ぶために」大切だと考える点を4つ語られた。4つの中でも私は「発言をする。アンケートに答える。」の点に大変共感した。高間先生は、「明日すぐ授業で使えるようなお土産を期待する」ような研究会への臨み方を「受け身」と表現し、逆に自分にとってプラスを自分でさぐる「前のめりな姿勢」での参加の仕方が、

「発言をする。アンケートに答える。」だと語られたのだ。「研究会で発言できればよいが、もし発言できなくてもアンケートに答えるは、書くことで意識して振り返ることができ、自分が学んだものを意識して蓄積することになる」という考え方に納得である。参加した研究発表会へのお礼の意味を込めて、私自身も心がけていることだが、改めてその大切さを考えることができた。さらに高間先生は研究発表会や授業公開を行う意義についても次のように言及された。「自分の授業を開く意味は、現状をそのまま見せて、助言をもらうことであり、困難な時こそ、授業公開をする意味がある。」来春新校舎による開校を目前に控えた本校では、一人一授業としての授業公開を全員行っているが、教師が見せるための授業という暗黙の掬えが残る。自校の教員が子どもの学びを自然と見合わせる授業研究へと、少しずつではあるが動き始めたところである。拠点校としてまず、私達スクールリーダーコースの二人と教職専門性開発コースのストレートマスターの二人とが連携して小さな渦を起し、校内の研究全体へと広がっていく動きにつなげていきたいと考えている。あせらずに現状を見ながら、できるところから着手していきたいと、やる気だけは人一倍の自分である。私自身は、11月に豊小、安居中、福大附属小の公開研究発表会に主体的に参加し、得るものが大きかった。今後のレポートにてまとめていきたいと思う。

最後に、合同カンファレンスのオリエンテーションの意義について考えたい。10月、11月のオリエンテーションから私自身は直接考えることがあった。そして、続くグループセッションでは、それぞれが自分の経験（背景）から語る場合と、オリエンテーションの内容からつなげて語る場合とがあった。それぞれの経験から語った場合も、テーマは同じであり、オリエンテーションの語りから刺激を受け、考えたことには変わりはない。つまり、ほとんど初めてのメンバーで構成されるグループでも、オリエンテーションの共通の話題があり、それを土台にそれぞれが光を当てるところから、各自の関心事が話されていくのである。さすがよく練られた構成である。今後も大いに楽しみだ。

## 教職専門性開発コース2年／美浜中学校 角田 望

11月の合同カンファレンスは、「他校の研究から学ぶ」というテーマで開催された。私は今年度、附属中学校、丸岡南中学校、附属小学校の研究集会に参加し、また至民中学校にスクールサポーターとして入らせていただいた。それぞれの学校で研究がなされているが、私が最も印象に残っているのが、附属小学校での「つながり」という言葉である。参観させていただいた理科の授業では、生徒たちがグループに分かれて、植物について月日をかけて調べてきたことを発表し、他のグループの植物と比べてどんな違いや発見があったかななどをグループで話し合う、というものであった。児童同士で発表し合い、質問し合い、話し合っ、深め合うといった、児童がつながりあえる場面がたくさん設定されていた。また、児童の発表を担当の青木教諭が「それってどうしてだと思っ？」、「そこからどんなことに気づいたかな？」という風につなぎ、児童たちが全ての発問を自分の中でじっくり考えられていたように思う。

また、昨年の同時期に、富山県の堀川小学校を学校参観させていただいた。ここでは、朝と帰りに「くらしのたしかめ」と称し、学級で一人がその日にあった出来事や、今考えていること、悩んでいることをスピーチする。それに対して、一人ひとりが自分のことのように考え、意見を

発表していく。そして必ず、「〇〇さんの意見に付け加えて」「××さんとは少し違うのだけど」という風の一つ一つの意見につながりがある。教員は口を開くことなく、児童たちにじっくりと考える空間を与え、意見が詰まった時にだけ手助けをする。学級全体で一つのことを考え、意見を共有している場面を見て、一人ひとりの学びが保証されていると強く感じた。

私は、この両校には「子ども同士の学びに期待している」という共通点があると思う。それを自分の授業実践で考えてみると、果たして本当にそれができているのか、という点で疑問である。今年度も昨年度も、生徒同士で課題を解決させるべく、グループ活動を積極的に取り入れたが、それを知識として生徒たちの中に落とすことができたかと問われると、肯定することはできない。教授型の授業はしたくない。でも知識は与えなければならない。その結果、生徒同士の活動は「やりっ放し」になってしまい、知識をつけてほしいと感じた部分は教授型になってしまっていた。この二つのバランスを取りながら、授業の全てが生徒の学びにつながるように、今後ともたくさんの授業を参観し、それを振り返り、自分の学びとなるよう、努力し続けていきたいと思う。

## 勝山南高等学校 堂森 峰春

# 連携校だより

勝山南高等学校の閉校まであと二月余りとなりました。現在は、65名の生徒が卒業と閉校に向け、毎日の学校生活を送っています。

学年が一つずつ減っていくにしたがい、教員の数も減っていく中で、学校としての活力をいかに維持して、生徒に十分な高校生活を保障するかという課題に学校を挙げて取り組んでいます。その活動の大きな柱は、校内の授業研究体制の構築と学校行事を通じた教員のコミュニティづくりです。

授業研究の体制は、全校的なものは未整備のままです。しかし、昨年度から公開授業週間を設け、また、積極的に校外の公開授業にも参加し、個々の教員が授業について考えるようになってきました。さらに今年度の公開授業週間には、昨年とは違った取り組みを行いました。



まず、本年度に予定されている指導主事訪問を11月中旬の公開授業週間に集中させました。このことは、単に授業を公開するというだけでなく、授業について考え、検討するという意識付けにつながりました。また、中学校への授業参観や直前に行われた至民中学校の公開授業研究会に参加した経験を生かして、知識教授型の授業とは違う新しい授業スタイルを模索する取り組みが、若い先生方によって行われました。本校は、職業系の高校ですので、専門教科ではこれまでも課題探求型の授業が多く取り入れられてきましたが、普通教科において、一斉にこのような取り組みが見られたのは初めてのことだと思います。講義するだけの授業と異なり、生徒が生き生きと活動する姿を多くの教員が実感することになりました。

また、今年度は昨年度とは比較にならないほど多くの教員が互いの授業を参観しました。今年度は、教員の半数がひとつの部屋にいたので、ひとりが動けば、それを見た何人かが一緒に参観にいける環境があります。参観後も自然と授業についての話をすることができました。学校全体として組織だった授業研究体制が作られていないこと、取り組みが継続して行われないことが課題です。

## 武生第一中学校 澤崎 秀之

平成24年度の武生第一中学校は生徒数が約700名弱、教職員が約50名でスタートを切った。大規模校としての良さを前面に出していくために、様々な実践に取り組む一年であるが、計画通りに進まないのが世の常で、その都度立ち止まって考えながら進めていく毎日。先生方と生徒た

学校行事への取り組みでは、昨年度から、行事の計画や運営に関わる教員の範囲を広げるように意識してきました。それまでは、主担当となる1名~2名の教員が計画を立てていたのですが、計画の段階から多くの教員が関わることで、全体のイメージを共有しながら進行していくことを目指しています。

最後の学校祭は、来春開校する特別支援教育学校の工事がはじまり、グラウンドも体育館も使用できないため、体育祭を中心にしたこれまでのあり方は、大きく変更することを余儀なくされました。4月当初から学校祭総務を担当する教員数名は、毎週会議を開き、学校祭の全体像を話し合ってきました。これまで、一人の担当者が行ってきた作業を5人~6人のメンバーで行えたことは、その後の各部署ごとの活動に統一感をあたえることができたと感じます。

教員間のイメージの共有は、生徒の活動との相互作用でもありました。最後ということで、単に自分たちのパワーをはじけさせる催しだけでなく、儀式的な時間が例年よりも多く取られたり、同窓会等、学校の外の団体との調整が必要であったり、例年とは異なる進行を生徒は自然と受け入れ対応してくれました。限られた条件の中で自分たちができることを考え、計画し実践してくれたと思います。体育祭の出場競技を決める時には、生徒たちは粘り強く話し合いを続け、その間じっくりと待つことができた教員集団がいました。3日目には県内外の多くの学校の協力を得て、地域の方々や保護者、同窓会員のみなさんを招いた「交流フェスタ 紡の日」を無事、開催することができました。



今年は、学校行事に限らず、日常的に生徒や授業のことを話合う機会が多くなっていると感じています。特に担任である3人は、その日の最後に会話を交わして帰宅することが日常になっています。閉校は、外からの変化ですが、授業について考えることや学校行事への取り組みを通して、最後の卒業生に価値ある学校生活を保障しようとする教員の内側の変化がはじまっているように思います。

ちとが悪戦苦闘しながら自分たちの学校に魅力を感じ、自分たちの学校を誇らしく思えるような学校にしていきたいとの思いで、私自身の2年目の実践もスタートさせた。しかしながら、学校の現場は一筋縄ではいかないことばかり。年の初めに教職員の異動があり、新入生を迎え入れ、生徒たち

の学年が進む。昨年度までの実践に積み上げをして、自分の頭の中で思い描く学校像に迫るために、先生方とチームワークを高め、組織として学校が機能するよう試行錯誤を繰り返す。その際に、学校の中だけで研修を繰り返していくと、どうしても見えにくくなってしまふ部分がある。いわゆる「外部からの視点」が欲しいときがある。そんなときに、昨年度と今年度は教職大学院の先生方や合同カンファレンスで学びを共にさせて頂いている先生方が本当に心強い味方となっている。自分の実践や学校の今年のスクールプランに基づいた実践を進める際に、どうしても自分の頭だけでは行き詰まることが度々ある。思案中のときに何気なく聞く教職大学院での先生方の言葉の一つ一つが、外部からの視点となって大きなヒントを与えてくれる。また、教職大学院の松田先生や木村先生、隼瀬先生が一中に来て下さり、そこでの研修会や授業参観を通して示唆して下さる言葉には本当に大きなヒントが隠されている。現在、私が一中で実践を深めているのは、生徒指導の側面に関わる研究だが、教職大学院で学びを深めるうちに、『生徒指導＝授業』という確信にも似た思いを深めるようになった。それは同僚の先生方から発せられる何気ない言葉や綿密に計画された学年行事や学校行事での生徒の姿や振り返りを省察すればするほど感じられる思いである。



さて、2年目の今年は、授業に対する先生方の思いと生徒たちが日々どんな思いで授業を受けているのかをスタート地点にして、授業と生徒指導の関わりに重点を置いて実践を進めてきている。特段、変わった実践を行っているわけではなく、大規模が故に見落としそうになる、たくさんの生徒の日々の姿を大切にしたいという思いが原点にある。そのためには、1時間1時間の授業で生徒と先生方がどんな関わりを持っていくかが重要になる。活発で積極的な生徒は

発言や行動から様々な情報を汲み取ることができるのだが、いわゆる大人しく目立たない生徒にも光を当て、大切にしたい。そして、その思いを先生方にも学校の中で共有してもらいたい。そんな願いでいる。リーダーの育成の裏側には必ずフォロワーとしてのたくさんの生徒の存在が大切になる。生徒たちがどんな思いで毎日の授業に取り組み、先生方にどんな思いを持っているのかを知りたい。その為に、1学期間は学校歴が新しい先生方にも生徒のことをできるだけたくさん知ってもらえる機会や場面の設定を行った。日々の観察や学校生活アンケート、教育相談、スクールカウンセラーとの連携など現在、きちんと学校に息づいている機能をもう一度丁寧に点検した。そして2学期の現在、学級活動や道徳の時間を使って、生徒が学校で安心して生活できるようにするための側面として、「いじめの未然防止」にかかわるテーマで授業づくりを行った。先生方にフォロワーの立場になって頂き、各学級の生徒が級長、副級長を議長団に学級会を企画し、自分のクラスをフィールドに、いじめが起きない学級や集団であるためにはどうしたらよいかを話し合う授業を行った。建前ではなく、自分の学級を土台にして話し合いが進むので生々しい部分もハラハラする場面もあるのだが、話し合いが進むにつれて、真剣に議論を交わすようになる。もちろん、話し合いがうまくいくクラスばかりではなく、担任の先生が頭を悩ます場面も起きる。だが、そこが一番の『指導の要』で、生徒の思いの中に隠れている未熟な部分や指導を要する不適切な発想にメスを入れるチャンスになる。若手の教員もベテランの教員も持ち味は違っても、生徒を良くしたいという思いは同じで、1時間の学級会のために1ヶ月も前から念入りに下準備に協力して下さった。そして、当日の授業には同学年の先生に他学年の先生方、そして校長先生、教頭先生、教務主任、生徒指導主事などの先生方にもその学級会に参加して頂いた。日ごろは直接、話を聞けない先生方から、『授業』という場面で自分たちのクラスの問題にアドバイスや示唆をもらう機会を得た。授業後も生徒たちの振り返りや先生方の省察などから様々な問題点が浮かび上がり、新しい課題が生まれた。今は、3学期の初めに教員間の研修を再度行って、その課題に対応していきたいと考えている。

今年の実践の一部を振り返って見たが、福井大学の教職大学院が自分の学校を研究のフィールドにしている教職大学院だからこそ、実践→省察→実践・・・という自然な流れで研究を進めることができているということに改めて実感している。研究のための研究ではなく、自分の勤務校に大学が連携していることの意味を2年目の今は本当にありがたいと感じている。

## 福井商業高等学校 福岡 利夫

福井商業高校は、商業科、会計科、情報処理科、流通経済科、国際経済科の5学科8クラスの大規模な商業専門高校です。会計言語能力、自然言語能力、コンピュータ言語能力の3つの柱を基本とし、各学科の専門科目を深く学んでいます。生徒は、学習と部活動の両立に心掛け日々熱心に取り組んでいます。普通科目の他に簿記や情報処理、電卓、商業経済などの商業専門科目を全体の約3分の1学び、主に全国商業高等学校協会主催の検定試験を受験します。今年度は、これらの検定1級を3種類以上取得することを目標に掲げ、さらに高度な資格取得にも挑戦しています。商業に関する知識や技能の習得が、資格となって還元されることで達成感を得、次の目標を設定していきます。

昨年度、教職大学院へ入学するにあたり、新たに教師の学ぶ自主的な組織を設け、課題を共有し解決に向けた2年間の研究活動を始めようと、普通科・商業科の学科を超えて

7人の先生で授業研究会を立ち上げました。しかし、「何のための研究会なのか」、「授業を公開する意味やねらいがわからない」など、研究の目的や方向性が見えず、深い霧がかかった先の見えない不安な状態からのスタートでした。そこで「福商生に付きたい力、保護者や地域から望まれる生徒・学校像」について、多くの先生方からも意見をいただくことにした。その中には、生活・授業・教職員間の意識について少なからず疑問を抱いていることもわかってきた。さらに、その問題を解決する難しさも潜んでいることがうかがえた。研究会内においても、授業を公開することに対して、意見は入り混じっていた。「TTなどでいつも公開授業をしている感じだから、いつでも見に来てください。新採用の時は、よく先輩の授業を見て研究していた。」、「外部に対して今のうちからやっておく必要は無い。その時(上からの指示)になってからでもできる。」、「このような力をつ



「けたいから、このような授業をするのではないか。」と、その価値を共有するには十分ではなかった。このような中で、校内に限り、初めて公開授業が行われた。しかし意外にも、生徒たちは普段より前向きで真剣な顔つきであり、自分たちの学んでいる姿を見てもらいたい表情でした。先生も、「自分では気がつかないところを指摘されてよかった。次の授業では、そこを考慮して臨むことができた。」と、肯定的な意見をいくつもいただきました。生徒と向き合い、授業を通して教職員が互いに助け合いながら力量形成を図ってしていくことが何より大切と考えます。授業こそが解決の糸口をつかむ手がかりであると研究会の方向性にも少し明かりが見えてきました。

本年度は、本校での学びが地域社会からどのように受け止められているのか、どのような学力が必要なのか、今後の指導方法の参考にするために外部の方の意見を多く取り入れることにしました。一つは、生徒の就職先である企業の方やPTAの役員の方に商業科の授業を参観していただきました。「授業方法は素晴らしく、もっと生徒とともに授業に参加し、こちらからも質問がしたい。」と立場を越えての意見や、「先生が思っている、わかる授業の自己評価と生徒が理解している評価に開きがあるのはなぜか。実行したあとに成果に対する反省をされているのか。」と改善すべき点まで幅広く意見をいただきました。このことで新たな視点から多くの課題が浮き彫りにされ、大きな刺激になりました。また、保護者の方には、生徒のみが取り組んでいた学年主催

の進路ガイダンスに、お子様と一緒に参加されるように働きかけました。企画や実施方法に関する指摘もいただきましたが、就職や進学に対する現実をともに受け止めることができたようで、今後も保護者が参加する企画があることを望む声を多くいただきました。

もう一つは、生徒がこれまでの本校での学びを自ら伝える機会をつくりたいと思いました。これまでの、教員が中心となって学科の説明をおこなう体験入学から、生徒が授業や部活動を通して学んできたことを伝える、生徒主体の体験入学への変更です。本校の生徒の多くは、人前でも動じず自分の意見を素直に表現できます。生徒の良さを引き出すとともに中学生に語ることで、これまでの学びを再認識できると考えました。また、この「在校生と語る会」では進行役には中堅の商業科の先生をお願いし、新たに本校にこられた先生も一緒に聞き合うようにしました。中学生、就職・大学などの進学直前の高校生、先生方すべてが本校の魅力を感じてもらえることを期待しました。情報実習も生徒がわかりやすく言葉を選び丁寧に中学生に教えることで、学び・伝え・深めることができたものと思います。

現在、研究会でのテーマについて「つながり（学習・人）」と「考える力」という視点でやっと見えてきた段階です。地域社会の要請に応える公職としての立場と学校の独自性を統合し、子どもの学びと教師の学びを補完的に連動させるために、教職大学院での貴重な学びを大いに生かしていきたいと考えています。



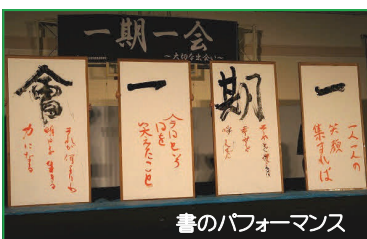
## 坂井農業高等学校 森 克彦

本校は、26年4月から商業・家庭系2クラス、工業系4クラス、農業系2クラスの計8クラスの総合産業高校としてスタートすることになっています。現在、再編に向けてカリキュラム、施設面での準備を進めており、中学校の保護者・先生方には概要がまとまり次第お知らせさせていただきます。



菊花庭園造りの様子

最近の本校の様子ですが、11月初旬に行われた文化祭では、生徒達が課題研究（プロジェクト学習）等で取り組んだ菊の鉢を庭園に見立てて職員玄関に飾り、大好評でした。私は、顧問をしている生徒とステージで書のパフォーマンスを行いました。心配をよそに終了時には喝采を浴びました。中旬には修学旅行が実施され、天候にも恵まれ3泊4日の沖縄の旅を満喫するこ



書のパフォーマンス

とことができました。また、これからは鶏の燻製作りが最盛期を迎えます。

私はプロジェクト学習のことを中核として学校改革実践研究報告を綴ろうと考えています。課題研究で取り組んでいるプロジェクト学習は、問題解決型の学習として効果的で、生徒が自発的、意欲的に取り組むことができる学習です。自ら考え、自ら実践することで、問題の考え方や解決の方法等について理論的なもの考え方を養うことができます。プロジェクト学習のテーマは誰かが与えるものではなく、生徒自ら考え出すもので、航海に例えるならば、1年間あるいは2年間かけて目的地に向けて出発し協力してゴールをめざすもので、その間生徒は確かな力をつけて成長していきます。そういう場をいかに増やしていくのかを考えるのが指導者であると思っています。生徒と一緒に取り組んでいくうちに、生徒自ら「・・・しよう」「・・・したらどうか」等の考えが出てきます。指導者があまり前面に出ないようにし、生徒が自分でできたという成就感・達成感を味わわせるようにかかわっていくことが大切です。教科書はありません。ないからこそ教材は無限です。

昨年末は「網下米の有効利用」をテーマに製粉から製造・分析・販売まで取り組みました。今年は、食品科で共通のテーマとして「米粉」を掲げ、全員で取り組んでいます。課題研究の班は、食品製造、食品化学、食品流通、応用微生物の4分野（3年23名が4分野に分かれて活動）ですが、



製粉実習

私は昨年の食品製造担当から応用微生物担当に変わりました。材料は昨年と同じ網下米を利用し、天然酵母を使用した食パン作りについて生徒と研究を進めているところです。学校祭の学科展では各班の研究成果を発表しました。

本年度より県の新規事業である高度技術者招聘事業において、米粉を使った料理講習会を4回（和食・洋食・和菓子・洋菓子）実施しました。天谷調理製菓専門学校から講師を招いての講習会でしたので、普段あまり料理をしていない生徒たちが非常に熱心に取り組んでいま



米粉講習会

した。馴染みのない米粉料理を実際で作ってもらうことで、米や米粉をより身近に感じられたようです。様々な体験を通じ、米粉について深く考えるようになったと思われれます。

勝山南高等学校学校祭にもお邪魔しました。網下米米粉を使ったクッキーやイチゴジャム等を販売したのですが、全く知らないところで発言したり、販売したりと実に堂々としていました。プロジェクト活動での成果だと思います。

21世紀のキーワードとして、「農」と「食」、「環境」が挙げられ、大きなウエイトを占めています。ますます農業の重要性が増しているのが現状です。農業と言えば食料生産。現在、我が国の食糧自給率は40%前後を推移しています。国内での食料生産を如何に増やしていくかが課題となっています。農業従事者の高齢化や担い手の減少、耕作放棄地も増加するばかり。2007年のオーストラリアの干ばつにより小麦の価格が高騰し、国内の小麦商品の値段は上がったことは記憶に新しいところです。大震災の放射能の影響も深刻になっていて連日報道されていますし、TPP問題についても先行き不透明です。国内の食料自給率が低い日本で食料危機は容易に訪れるかもしれません。不安材料ばかりの農業ですが、今こそ、農業に魅力を感じ、携わりたいと願う生徒を一人でも多く育てる必要があるのではないかと思います。そういった点からも、プロジェクト学習は有効な学習手段であると感じています。

## 日本教育方法学会 第48回大会開催の報告

福井大学学校教育専攻 遠藤 貴広

2012年10月5～7日、福井大学で日本教育方法学会 第48回大会が行われた。福井マラソンや桑田佳祐コンサートなどが重なり、深刻な宿不足で、一時は開催自体も危ぶまれたが、方々のご協力で何とか開催にこぎつけ、300人以上の参加者に恵まれた。

6日（土）夕方に行われた公開シンポジウムでは「教育実践研究の持続可能性を問う」という、これまで本学会では取り上げられることのなかった新しいテーマに挑戦することとなった。それは、教職大学院拠点校・連携校の取り組みに学ぶ中で構想されたもの

であるが、学校・大学・都道府県の壁を越えて検討すべき論題であることを改めて実感する場となった。

今大会は、最終日（7日）午後の課題研究、そして夕方まで続いたラウンドテーブルまで参加する会員が多かったことが、これまでになかった動きとして事務局を驚かせた。これまでの学会を再構築しようとする新しい芽が確実に出つつある。また、2009年から開催されていなかった学会員との授業研究協議会が、5日（金）午後、附属中学校のご協力で実施された。関係各位に改めて御礼申し上げます。

◇ 大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト ◇

## 日本教育心理学会に参加して

福井大学教職大学院 木村 優

2012年11月23日（金・祝）・24日（土）・25日（日）、琉球大学・千原キャンパスにて、日本教育心理学会第54回総会が開催された。私は23日（金・祝）の自主シンポジウム：「教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティの意義を問う一分野を超えた実践者と研究者の協働による授業研究」と、24日（土）の自主シンポジウム：「教師の実践知へのアプローチ：教師の専門性への視座」で、それぞれ実践研究の報告と発表を行った。ここでは、自主シンポジウム：「教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティの意義を問

う一分野を超えた実践者と研究者の協働による授業研究一」について報告する。

本自主シンポジウムには、「教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティ」のメンバーである高間祐治教諭（至民中）・鈴木三千弥教諭（至民中）、佐々木庸介教諭（陽明中）・森崎岳洋教諭（清水中）、福井県教育庁・牧田秀昭主任、福井大学から木村、笹原未来、石井恭子、杉山晋平、隼瀬悠里、福井大学教職大学院から小島俊祐、河野紘典、の計12名が話題提供及び指定討論を行った。自主シンポジウムはまず、私から「教育における

アクション・リサーチのための実践コミュニティ」の概要説明を参会者に報告した上で、実践コミュニティで継続実施してきた授業研究会について、実践者・授業者として高間教諭、教育研究者として笹原先生、それぞれの立場から学びの価値と意義について話題提供を行った。

高間教諭からは、実践コミュニティの授業研究会を、厚い参観記録と参観者の授業を見る視点の多角性により担保することで「授業参観できなくても授業が見える研究会」と意味づけをいただき、さらに、「実践者が1番得している学び手」と価値づけをいただいた。これらの意味と価値は、実践コミュニティの立ち上げ時から研究者メンバーで再重要視し、コミュニティの活動を通して実現すべき課題であった。このことを高間教諭から参会者である他の教育心理学研究者や学校教師の皆様にご話していただけたことが、コミュニティをコーディネーターしてきた私にとって大変嬉しく光栄で、それでも恐縮な気持ちでいっぱいだった。

笹原先生からは「多様な文脈との出会いがもたらすフレーミング」という観点で、授業研究会で検討される多様な授業参観記録から、他者の視点、解釈を知ること、＜私＞が『『地』に押しやったものを『図』として見る、捉え直すこと』で＜私＞の「志向性、価値観、理論的枠組み」が明確化されていく意義を語っていただいた。私たちが普段、＜私＞の目で見えて身体で感じていることは＜世界＞の一部でしかなく、意識的・無意識的に「何か」を捨象していることに改めて気づかされた。また、笹原先生は実践コミュニティでの学びを自らの専門領域である特別支援教育の枠組みで捉え直している取組や構想についても報告しており、この点もまさに実践コミュニティの狙い及び価値を象徴していることであった。

以上、木村、高間教諭、笹原先生の報告を受けて牧田主任にコメントいただいた。牧田主任は福井県での学校教育政策、教員研修をコーディネートしているお立場から、指導主事の力量形成という問題意識も踏まえて実践コミュニティの授業研究会の特徴と価値についてお話くださった。本授業研究会は、「授業を見た後に時間を置いて参観記録を持ち込む」、「研究会に参加する前に自分の中で何が課題であるか、確認されている」、「授業を見なかった者が、研究会の中で授業を組み立てる」、これらが同時に為されている、という大きな特徴があり、その目的は「ただ一つの方法をあぶり出すのではなく、各自の見方が徐々に変化していくこと」が狙われていると意味づけをいただいた。ただし、報告された多様な学びの保証は、(1)メンバーが福井大学教職大学院関係者という同質性による前提がある、(2)授業研究会が長時間、実施可能であり、時間制限のある学校では実施困難、等の課題も提示いただいた。また、本実践コミュニティの記録を書き蓄積すること

で、学校や教育行政にも本実践コミュニティと授業研究会の学びと価値を広められるのではないかと、とのありがたい助言もいただいた。

さて、牧田主任の指定討論まで終わり1時間が経過した。その後の1時間は、教育心理学会・自主シンポジウムではおそらく初めての展開であろうラウンドテーブルである。ラウンドテーブルでは、私たちメンバーがそれぞれ4つのグループに分かれ、参加者の皆様に直接、具体的に実践報告を行い、さらに参会者の皆様から御意見をいただきながら議論を展開した。各グループの報告者は可能な限り、実践者・院生・研究者でバランスを保ち、既に全体報告済みの木村、高間教諭、笹原先生、牧田主任は議論を活性化する役割を担った。また、各グループでメンバーが話し合いをコーディネートすることで、参会者及び会場担当学生も含め、その場にいる全ての人が議論に加われるよう配慮した。メンバーの報告内容や参会者の構成により各グループの議論は様々だが、各グループでは規程時間が過ぎても話し合いが続いたことから、私たち報告者だけでなく参会者の皆様にとっても有意義な時間となったと考えている。

なお、本自主シンポジウムの参会者数は私たちを含めて約30名であった。参会いただいた慶應大学・鹿毛雅治教授や九州大学・當眞千賀子教授からも実践コミュニティの活動を高く評価いただき、今後の課題も示していただいた。

今回、教育心理学会第54回総会で私たちの実践コミュニティの活動を広く公表し、多くの参会者の皆様と議論できたこと、それにより実践コミュニティのさらなる展望を拓くことができたこと、それから、実践コミュニティのメンバーが協働して自主シンポジウムを開催し、円滑に進めることができたこと、これらが私たちの大きな成果であり財産となった。



## 教職専門性開発コース2年 小島 俊祐

私はこの学会に参加し発表することでまた一つ将来の目指してみたい展望が拓かれた。発表後の率直な感想は、課題がたくさん残る思いと新たな期待感の入り混じった気持ちだった。私たちが教職大学院で大事にして学んできたことや価値づけしてきたことが同じ教育の分野の中でも教育心理学の分野を専攻する方にすら伝わりにくかったようである。例えば、私たちは自分たちの専門分野、校種、教科、そして世代を超えたメンバーと語り合い、傾聴することで、自分の実践を振り返りながらその価値を捉え直し、

意味づけし、実践につなげていく学び合いを大事にしている。そして、実践を記録にして残し積み上げていくことで、時間を超えて実践を振り返る手立てとして活かしていくことに価値があると信じて疑わなかった。それこそ、自分自身の学びの実感があるからこそその考えであり、私自身将来的に大事にしていきたいと考えている。しかし、ここでの価値の保証は福井大学教職大学院を通して共有されているものが多く、自分自身で再度捉え直しながら自分の実践を自分の言葉で相手に伝えるように伝えていく必要を感じ



た。そのように強く感じたのは琉球の地で再会し、自主シンポジウムに参加してくれた友人に言われた言葉が私の胸に突き刺さったからである。「結局、教育の目的ってなに？学び合えればそれでいい

の？成果はあるの？正直、あまりよくわからなかった。」私は友人の言葉を聞いて更に社会の中での教育の位置づけを考え、発信していく必要があると感じた。教育を語ることを教育の分野内だけで留めてはいけなことを痛感した瞬間であった。私自身も学びを実感するまでにある程度の長期的な時間を要したこともあるが、個人内での学びに留めないためには、価値を共有していない人にも伝わる方法で発信をしなくてはならない。まだまだ課題が残ることを自覚した。

しかし、課題が残るものの、私はCo-PAREの取り組み自体に新たな展望の可能性を感じている。Co-PAREの研究会を通じて、研究者、ベテラン教諭、院生と共に一つの授業を研究することの楽しさと授業づくりを考える視点が広がっていることを実感しているからである。また、教師の力量形成のためのラーニング・コミュニティの必要性を報告する研究は他にもあるようだが、実践者として実践を報告する事例はほとんどないということも知った。Co-PAREでは、授業参観をした授業の研究が主な取り組みであり、授業参観者は授業の参観記録を持参することが原則決められている。この授業記録を用いることがこの研究会の鍵になることを間違いないだろう。参観者は自分の授業の見取りを報告し全体で吟味することを可能とし、また、授業を参観できなかったメンバーにとっては授業内の学びを想起

させる媒介物となり、研究会の参加での学びを補うものとなる。そのため、私は参観記録の書き手は授業参観をしていない読み手にも伝わるような記録を書こうと参観の視点を明確にすることを心がけるようになっていた。参観記録を書き、授業内の自分の解釈を確かめることを毎回意識している。普段かかわる子どもたちと照らし合わせながら、普段自分が大切にしたいことを他者の授業を参観しながら関連付けたり、比較したりすることで明確にするだけでなく、他者の授業観や子ども理解の考え方を取り入れる機会となっている。この研究会の魅力は、経験の異なる参加者が同じ立場で学んでいるように感じられることが大きい。ベテラン教諭も授業を行う際の悩みを語ってくれるのである。誰かの話題提供をもとに皆が考えを巡らせて語り合う。そこには立場の壁はなく、平等に語る機会がある。この研究会の学び合う雰囲気を作りだしているのは、絶妙なコーディネートを行う木村先生の存在はもちろんのこと、参加される先生方や院生の学びに対する姿勢が、とても謙虚であり、互いに学び合うことに対して価値が共有されているからこそ成り立っている。ここでの学びを今後どのように発展させながら、外部に発信することができるのか考えると楽しみで仕方がない。今回の発表で指摘された文字媒体の参観記録だけでいいのか、ビデオ記録は使わないのかなど今後吟味していく課題は残るが、私たちの探究はまだ始まったばかりである。

Co-PAREを通して出会えた先生方が見せてくれる背中はとても大きく、私の心を揺さぶってくれる。目指したい背中を見せてくれる先生方と肩を並べて学び合える喜びをもとに、今後ともCo-PAREの船出に参戦したい。そして、私には将来的に神奈川を拠点に福井とつながるラーニング・コミュニティを築いていきたいという夢がある。まだまだ一つの授業を全うするだけの力もない若造だが、出来る限りのことに挑戦していきたいと思う。

## 教職専門性開発コース2年 河野 紘典

今月のテーマである「他校の公開研究等に参加して」と少し離れるかも知れませんが、私は11月23日から25日に琉球大学で開催された日本教育心理学会に参加したのでそこの学びを書きたいと思います。今回は、福大教職大学院のスタッフの先生方と現職の先生方と院生の学び合いのコミュニティであるco-pareの活動とメンバーの学びを報告しました。

今まで私自身が学んできたことを他者に伝えるという機会を得たことによって改めてco-pareにおける私自身の学びを振り返る場となりました。この学会に参加して学んだことは2つです。1つは自身の学びを省察して、記録化することの大切さ。そして、もう1つは他者に自分の学びを伝えることの大切さです。

まず、前者ですが、私はco-pareに参加している時、様々なことを考え、自身の経験などと照らし合わせながら、何かを学んだ気になって日々のインターンシップに戻っていました。しかし、co-pareでの学びを記録したものはメモとして書いていたノートしかありませんでした。そのため、漠然と学んだ気になっていただけで具体的に何を学び、それをどうインターンや日常生活に生かせるのかまで吟味していませんでした。そのため、今回教育心理学会に参加するにあたって、私自身の学びをじっくり省察

する機会になりました。このco-pareでの学びを振り返ることは容易な気がしていたのですが以外と思い出すことができませんでした。なぜなら、学んだ結果は覚えているのですが、その学びに至るまでのプロセスをなかなか思い出すことができなかつたのです。だからこそ、省察して記録化することの大切さを改めて実感することができました。

後者については、発表準備を行っている時と実際に教育方法学会で発表した時に2つのことを学びました。1つは他者に語ることによって自分の思考のプロセスを思い出す事ができたことです。他者に伝えるまでに自分の中で気付かないうちに理解していることがあり、それを思い出すことができました。もう1つの学びは自分自身の学びを他者に伝える時に学びの過程を他者と共有する大切さです。自分が学んだ結果だけを伝えるだけでは他者に伝わらないことを改めて理解する機会になりました。

これから長期実践報告をまとめて、ラウンドテーブルで発表することを控えている私にとって今回参加して学んだことは大変価値あるものでした。長期実践報告をまとめる中で私自身の学びのプロセスを捉え直し、それを他者に分かるように伝え、自分自身の新たな展望につながるように努力していきたいと思います。

# 実践し 省察する コミュニティ

Round Tables: Winter-Spring Sessions 2013 for Reflective Practice,  
Organizational Learning, and Reflective Institutions

2013.1.12-13 実践研究東京ラウンドテーブル  
於：明治大学大学会館・アカデミーコモン  
2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル  
於：福井大学教育地域科学部1号館他

For Communities of Practice and Reflection since 2001

## 1/12 (sat)

session I 13:30-16:30

### Zone A 学び続ける教師を支えるために

－「教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議」の議論をめぐって－

(明治大学大学会館3階第1・2会議室)

「修士レベルの教員養成課程の改善に関するワーキンググループ」の審議経過について

加治佐 哲也 (兵庫教育大学学長)

「教育課程の質保証等に関するワーキンググループ」の審議経過について

寺岡 英男 (福井大学副学長)

報告と討論：私の大学での教員養成改革の構想と戦略

宇都宮大学 福島大学 静岡大学 他

### Zone B 「実践と省察のサイクル」による実践力の形成－コミュニティのコーディネーターの養成と研修－

(明治大学アカデミーコモン11階3110)

「専門職の学びあうコミュニティ」の形成とコーディネーターの養成・研修

三輪 建二 (お茶の水女子大学)

明治大学社会教育主事課程における「実践とラウンドテーブル」の取り組み

島田 知明 (明治大学大学院) 他

<職場と講習を往還する学び>

来住野 清子 (昭島社会教育主事嘱託職員)

福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」における実践の自己評価・相互評価

\* 報告者未定

コーディネーター：倉持 伸江 (東京学芸大学)・杉山晋平 (福井大学)

## 1/13 (sun)

session II 9:20-14:20 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聴き取る：実践研究東京ラウンドテーブル2013

(明治大学アカデミーコモン9階-11階)

poster session 11:00-11:50 明治大学社会教育主事課程、東京学芸大学新宿Youth Project、お茶の水女子大学児童館ボランティア他

## 3/2 (sat) 12:40-17:40 専門職として学び合うコミュニティを培う

Zone A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

Zone B 教師教育：学び続ける教員を育てる<人>と<組織>のパラダイム転換を考える

Zone C コミュニティ：世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする－持続可能な社会と若者の社会参画－

Zone D 授業改革の扉をひらく－もし、わたしたちが子どもだったら－

## 3/3 (sun) 8:30-14:00 実践研究福井ラウンドテーブル2013

### Schedule

12/25 tue - 12/27 thu 12月の集中講座

12/22 sun 教職大学院入試事前説明会

1/4 fri - 1/7 mon 1月の集中講座

1/26 sun 1月の集中講座 (予備日)

2/9 sun 教職大学院入試 (第2次)

### [編集後記]

11月は研究集会が続きました。巻頭言をお願いした山本校長先生の安居中学校を始め、まさに実りの秋を実感できる内容の濃い発表ばかりでした。それがもう2012年も残すところあと1週間。M2の院生は、いよいよ長期実践報告という実りに向けて、産みの苦しみを感じているはず。健康に気をつけて、納得できる「今の答え」をみつけてほしいと願っています。(吉村)

## 教職大学院Newsletter No.48

2012.12.25発行

2012.12.25印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp